

大 波 小 波

訪日した鄧小平さんの帰国を待ちうけていたように、北京では壁新聞による民衆の告発が表面化した。しかもそれが毛沢東の政治を問い返す動きをはらんでいるだけに注目されるが、告発に取り組む民衆が真剣そのものであることは『朝日』

中 国

ジャーナル」12月8日号の「風速

計」からも察しがつく。「北京はいま朝や夜には霧下に気温が下がる。寒気の中で、ひとびとは立ちつくし、壁新聞を読んでる。便箋(びんせん)に小さな字でびっしり書かれたのもあればポスター紙九〇枚、二〇〇メートルに

及ぶ長大なものもある。その文章は、人の情理をくみ、天理に従え、などときわめて中国的なもの」と伝えている。

だが、ポスターの文章を中国的とする短絡はちと気になる。かつて儒教世界ではその規範原理を天の観念と結び

的

つけ、天理、天道と称したが、この文章も根はそこにあるか

らだ。もっとも今回の告発がもつぱら中国の現代(近代)化を是とする立場のものだけに、そうなると矛盾を感じる。

が、本紙8日付夕刊で中嶋嶺雄が毛沢東政治の問題点を、その家父長的な体質と「一種の道徳主義的な大衆の教化

を伴って著しくカリスマ化した権力構造」にあったとしていることで、それも解消する。

比喩(ひゆ)的にいえば壁新聞の文章は、毛沢東によって歪められた儒教の理念を原則に戻すよう求めているのだ。またその理念が現代化への志向と矛盾しないのは、儒教に実事求是、つまり実学への志向がふくまれているためである。

近代化という言葉がもつすくれてアジア的概念を儒教理念と重ね合わせ、日本がたどったそれと異なる現代化をめざしていることで先刻の文章はいかにも中国的といえるだろう。(半可通)